

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 北海道教育委員会
 所 在 地 北海道札幌市中央区北3条西7丁目
 代 表 者 職 氏 名 教育長 柴 田 達 夫

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	ほっかいどうすつつこうとうがっこう	ふりがな	きたむら としたか
学校名	北海道寿都高等学校	校長名	北 村 敏 貴
ふりがな	すつつちょうりつすつつちゅうがっこう	ふりがな	なかむら としき
学校名	寿都町立寿都中学校	校長名	中 村 寿 樹
ふりがな	すつつちょうりつすつつしょうがっこう	ふりがな	ねい あきお
学校名	寿都町立寿都小学校	校長名	根 井 朗 夫
ふりがな	すつつちょうりつおしよろしょうがっこう	ふりがな	やまもと やすひろ
学校名	寿都町立潮路小学校	校長名	山 本 康 博

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

小学校高学年における教科化に向けた指導と評価の考察及び小学校高学年、中学校、高等学校における CAN-DO リストの形での学習到達目標を明確化し、英語による言語活動を多く設定したカリキュラムを考察する。

(2) 研究の概要

- ① 小学校第3、第4学年の外国語活動型、第5、第6学年の教科型の学習内容及び評価の研究
- ② 中学校・高等学校の目標及び内容の高度化を踏まえた小・中・高等学校10年間の系統性のあるシラバスの作成と CAN-DO リストを生かした評価や評価方法の研究
- ③ CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるような独自教材の開発・作成
- ④ 校内での英語の使用場面を意図的に多く設定するための、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などを活用したモジュール型の指導の考察

(3) 現状の分析と仮説等

① 現状の分析と研究の目的

平成 19 年度から第 3～6 学年で英語活動を行い、平成 23 年度から教育課程特例校として、外国語活動を教育課程に取り入れ実践しているため、英語を話すことに抵抗の少ない児童生徒が多いが、中学校では「読むこと」や「書くこと」、文法の指導が行われるため、英語学習への苦手意識を感じる生徒が少なくない。

また、全国学力・学習状況調査の結果から家庭学習の時間が少ないことやテスト等の結果から全国平均と比較し、特に、「書くこと」に課題がある生徒が多い。

そのため、CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるようなオリジナル教材を開発・作成するとともに、小・中・高の 10 年間を見通した、系統性のあるシラバスの作成を目指していく。

また、小学校第 5、6 学年での外国語活動の教科化に向けて、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のすべての領域に関し、中学校での英語授業の内容との接続を踏まえた学習内容となるように配慮する。

さらに、校内での英語使用の場면을意図的に多く設定するため、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでも単なる文法事項の指導や単語テストなどではなく、言語活動を取り入れるなどしてその効果を検証し、今後のモジュール型の英語授業の設定の方法を考察する。

② 研究仮説

ア 小学校第 3、4 学年の外国語活動で英語に慣れ親しむことにより、第 5、6 学年の教科型の学習において、「話すこと」「聞くこと」に加え、「読むこと」「書くこと」の円滑な導入を図ることができ、さらには中学校においてより多様で高度な学習活動を展開することができる。

イ 小・中・高 10 年間の系統性のあるシラバスを作成することにより、指導内容の系統性や指導方法の継続性、目標の一貫性をもたせることができるとともに、CAN-DO リストを生かした評価や評価方法を工夫することにより、指導の改善につなげることができる。

ウ CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させたオリジナル教材を作成・開発し、授業で活用することにより、児童生徒は英語の運用能力の向上を実感でき、外国語活動等への意欲化につなげることができる。

エ 授業はもとより、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間など短い時間内での英語使用の場면을意図的に多く設定することにより、短い時間での言語活動の有効性を検証し、今後のモジュール型の英語授業の展開を考察することができる。

③ 研究成果の評価方法

ア アンケートによる評価や 4 技能の能力を図る定期的な学力調査に加え、英検などの外部試験などの結果の分析

イ CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う各活動の内容を関連させた目標と指導と評価の一体化

ウ 小学校第 5、6 学年における評価規準の作成と授業評価の実施

エ ALT 等の複数による評価や児童生徒に向けたアンケートの実施

オ 各年度における公開研究会や運営指導委員会での指導助言

(4) 研究開発型 ※平成 27 年度新規採択件については、平成 26 年度は斜線を引くこと。

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次 (H26)	第二年次 (H27)	第三年次 (H28)	第四年次 (H29)
①小学校 外国語活動型	第 3・4 学年 1 コマ	第 3・4 学年 1 コマ	第 3・4 学年 2 コマ	第 3・4 学年 2 コマ
②小学校 教科型	第 5・6 学年 1 コマ	第 5・6 学年 2 コマ	第 5・6 学年 3 コマ	第 5・6 学年 3 コマ

(5) 研究計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

第1年次 (H26)		
<p>小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3学年から第6学年までの4年間の系統性・継続性のある指導計画を作成する。 ・第5、6学年ではCAN-DO リストを作成して身に付けさせたい能力を明確にし、指導と評価の研究を行う。 ・第3、4学年では、「聞くこと」「話すこと」の活動を中心とした身近で基本的な英語表現に慣れ親しむ活動を行う。また、Hi, friends、準拠デジタル教材の効果的な活用について研究する。 ・第5、6学年では、「読むこと」「書くこと」の活動を導入し、第3、4学年で慣れ親しんだ英語の表現を文字として触れることにより正確な英語の表現や理解につなげる。その際、第5学年では、cook、lookなどの平易な単語を発音と綴りとを関係付けて指導を行い、第6学年では、平易な文を読んだり書いたりできる英語力を培う。 ・町独自のイングリッシュキャンプを開催し、体験型英語学習の成果や、英語学習への意識の変化を検証する（以後4年間継続）。 ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。 ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。 	<p>中学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校で外国語活動を受けている生徒に対応した英語による授業を基本とした指導方法の工夫改善により、コミュニケーション能力の基礎を育成する。 ・TBLT (Task-based Language Teaching)の視点から、各学年で扱われる文法事項を習得して活用するのに役立つオリジナルのタスク集を作成する。 ・CAN-DO リストの能力記述文の内容とタスクの内容に整合性をもたせる ・CAN-DO リストを工夫改善し、評価や評価方法の改善充実を図る。 ・小学校の教育課程づくりに参画する。 ・小学校英語の早期化・高度化を踏まえた中学校の目標や内容、指導計画を研究する。 ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。 ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。 	<p>高校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他校種との授業参観、乗り入れ授業、公開授業等を通じた中高の連続性を踏まえた指導計画を作成する。 ・CAN-DOリストの改善、指導法の工夫等により授業改善に取り組む。 ・中高の連続性を踏まえた高校導入期の学習内容や指導方法等の検討を行うとともに、中学校の教育課程づくりに参画する。 ・中学校の目標や内容の高度化を踏まえ、発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導計画について研究する。 ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。 ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。
<p>○効果的な英語による英語指導を目指し、小学校と中学校の授業におけるクラスルームイングリッシュや、英語による指示表現などの統一化や、学年進行での追加・発展の内容を考察していく。</p> <p>○英語検定などによる客観的な分析を行う。その結果を、指導内容や指導方法に反映する。CAN-DO リストによる自己評価とのずれも検証する(以後、4年間随時実施し、検証を継続する)</p>		

第2年次 (H27)

小学校

- ・英語によるコミュニケーション能力や意欲をはぐくむため、小学校第3学年から第6学年までの4年間の系統性・継続性のある指導計画を改善する。
- ・第3、4学年では「聞くこと」「話すこと」を中心に、自己紹介など積極的に自らのことを英語で発信できる力を培う活動を行う。また、Hi, friends, 準拠デジタル教材の効果的な活用について研究する。
- ・第5、6学年では、「Hi, friends!」の補助教材に加え、韓国やシンガポールなど、小学校英語教育の先進国の教材等も参考にし、文字指導の内容を検討する。その際、第5学年では、cake、lakeなどの平易な単語を発音と綴りとを関係付けて指導を行い、第6学年では、平易な文を正しく読んだり書いたりできる英語運用能力を培う。
- ・「Hi, friends!」の補助教材を活用し、文の構造について理解を図る
- ・CAN-DO リストを用いた自己評価と教員による評価のずれや一致について考察する。
- ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。
- ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

中学校

- ・小学校で教科化された英語教育を受けた生徒に対応した英語による授業を基本とした指導方法や、オリジナルのタスク集を活用した授業展開を工夫する。
- ・CAN-DO リストを活用した授業を実践し、パフォーマンス評価を適切に取り入れて評価を行い、指導の改善に生かす。必要に応じてCAN-DO リストを改善する。
- ・小学校段階での外国語活動の学習内容を踏まえ、英語による自己紹介、自分の住む町の紹介など、発信型のタスクの在り方を考察する。
- ・小学校の教育課程の改善に参画する。
- ・中学生版イングリッシュキャンプの実施を検討する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

高校

- ・乗り入れ授業、公開授業等を通した中高の連続性を踏まえた指導計画の実践を行う。
- ・CAN-DOリストの工夫改善を行う。
- ・中高の連続性を踏まえた高校導入期の学習内容や指導方法等を実践するとともに、中学校の教育課程の改善に参画する。
- ・発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導内容を実践する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

定期的に小学校、中学校の英語担当者が相互の学校の授業に乗り入れる。それにより、9年間を見通した指導内容を検討するのに役立つだけでなく、多くの教員が関わることで個に応じた指導（より細かな習熟度別少人数指導）を検証していく。

第3年次 (H28)

小学校

- ・第3、4学年では「聞くこと」「話すこと」を中心に、興味・関心のあるものを話題として自らのことを英語で発信できる力を培う活動を行う。
- ・第3、4学年では、外国語活動の趣旨を踏まえた簡単な「読むこと」「書くこと」の言語活動を試行する。
- ・第5、6学年では、これまで2年間の成果で明らかとなる課題を基に教科型の指導計画の改善を図るとともに、中学校での領域ごとの言語活動なども参考にし、4技能の育成を図る。
- ・中学校での評価の観点、評価方法を参考にし、小学校第5、6学年のCAN-DOリストの見直しも含め、効果的な評価の在り方を検証する。
- ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。
- ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

中学校

- ・英語による授業を基本とした指導方法の研究を行う。
- ・CAN-DO リストを活用した授業を実践し、パフォーマンス評価を適切に取り入れて評価を行い、指導の改善に生かす。必要に応じてCAN-DO リストを改善する。
- ・習熟度別少人数指導の時数を多くするなどし、努力を要すると判断されるコースを中心に、基礎的・基本的な内容の定着に努める。
- ・朝自習の時間や、放課後学習の時間なども活用し、身近な言語の使用場面を定期的に設定し、言語活動の充実に努める。
- ・これまでの「発信型英語教育」の総まとめとして、道徳、総合的な学習の時間との連携を図り、生徒の手による町を紹介する英語ホームページやガイドブックの作成を行う。
- ・小学校の教育課程の改善に参画する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

高校

- ・他校種との授業参観、乗り入れ授業、公開授業等を通じた小中高の連続性を踏まえた指導内容やCAN-DOリストの検証、指導法の工夫等により授業改善に取り組む。
- ・中高の連続性を踏まえた高校導入期の学習内容や指導方法等を工夫改善するとともに、中学校の教育課程の改善に参画する。
- ・発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導内容について検証する。
- ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。
- ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

第4年次 (H29)		
<p>小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3、4学年では、これまでの成果を総合的にまとめ、中学年にふさわしいオリジナル教材を作成する。 ・第5、6学年では、前年度の学習内容を発展させ、「書くこと」について、身近な場面における出来事や体験したことなどについて自分の考えや気持ちを書く活動を研究する。 ・第5、6学年では、これまでの成果を総合的にまとめ、中学校との効果的な接続を目指したオリジナル教材の作成を目指す。 ・全教員の指導力向上のため、中・高等学校英語担当教員と連携し、研究授業、校内研修、先進校調査研究を行う。 ・全教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。 	<p>中学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語による授業を基本とした指導方法の研究を行う。 ・CAN-DO リストを活用した授業を実践し、パフォーマンス評価を適切に取り入れて評価を行い、指導の改善に生かす。必要に応じてCAN-DO リストを改善する。 ・CAN-DO リストによる定期的な自己評価を行い、生徒個人の課題を明確化する。 ・第3年次目で導入する、英語ホームページやガイドブックの作成で「書くこと」の力を培うことに加え、修学旅行等の場面で、これらを基に口頭で説明（プレゼンテーション）を行うなど、郷土の歴史や文化に関する情報を英語で発信する活動を行う。 ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。 ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。 	<p>高校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他校種との授業参観、乗り入れ授業、公開授業等を通じた小中高の連続性を踏まえた指導内容やCAN-DO リストの検証、指導法の工夫等により授業改善に取り組む。 ・発表や討論、交渉といった高度な言語活動を含む指導計画について成果と課題を検証する。 ・英語担当教員の授業力向上のため、研究授業や校外での研修、先進校調査研究を行う。 ・英語担当教員の英語力向上のため、英検等の外部検定試験を積極的に受検する。

○平成27年度の進捗状況・課題

1 進捗状況

- ・各学校種の Classroom English や CAN-DO リスト及び年間指導計画について、児童生徒の実態を踏まえて内容を適宜修正した。
- ・9月に文部科学省教科調査官の実地調査により指導助言を受け、今後の研究の方向性を明確にした。

(指導助言の概要)

- ・小学校では指導者のサポートを次第に少なくするなど、児童が主体的に活動できるよう工夫すること。
- ・中学校では小学校の内容を踏まえた発展的な内容にするとともに、英語で進める授業でも分

かったと実感させるようにすること。

- ・小・中学校におけるパフォーマンス評価について一層の研究を進めること。
- ・町内小・中・高等学校の児童生徒の実態や授業の様子を互いに把握し、指導の改善を図るため、授業公開、乗り入れ授業を積極的に実施した。

2 小学校について

<成果>

- ・小学校第3学年から第6学年の指導方法について、児童の発達の段階を踏まえた Hi, friends! や Hi, friends! Plus などのデジタル教材を活用した音声と文字を結び付ける等の指導方法の研究を深めることができた。
- ・文字指導において、十分に音声に慣れ親しんでから文字を扱ったため、児童は抵抗なく興味をもって読もうとする意識が高まった。
- ・英語教育推進リーダー研修で学んだ内容等を生かし、指導方法を工夫した授業を展開することができた。

<課題>

- ・第5、6学年における文字指導について、1時間あたりの文字を扱う時間、書く活動の配分や時期について、研究を更に深める必要がある。
- ・複式学級における指導体制や指導方法等の工夫について、検討する必要がある。

3 中学校について

<成果>

- ・小学校での既習事項を活用した言語材料の導入、英語による言語活動中心の授業を行うことができた。
- ・英語教育推進リーダー研修で学んだ内容等を生かし、指導方法を工夫した授業を展開することができた。

<課題>

- ・話すことや書くことなどの表現の能力の育成にかかわり、流暢さ（Fluency）の向上が見られるが正確性（Accuracy）を一層高める具体的な方策を検討する必要がある。

4 高等学校について

<成果>

- ・言語活動の工夫により、コミュニケーションな授業が定着し、英語での活動を生徒が楽しもうとする態度やコミュニケーション能力が高まり、活発な授業を展開することができた。
- ・教員が様々な研修等に参加することで、自らの授業を客観的に見直し改善を図ることができた。
- ・英語教育推進リーダー研修で学んだ内容等を生かし、指導方法を工夫した授業を展開することができた。

<課題>

- ・CAN-DO リストの適切な分析、及びその結果の生徒へのフィードバック方法について効果的な方策を検討する必要がある。
- ・発表や討論など、より高度でコミュニケーションな授業実践について検討する。

(6) 評価計画 ※平成27年度新規採択件については、第一年次から第三年次まで記載すること。

<p>第1年次 (H26)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校第5、6学年での「読むこと」「書くこと」に関する独自教材の作成とその検証 ・朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでの言語活動の導入とその検証 ・小学校第5、6学年のCAN-DO リストの作成とその検証 ・各校種の指導計画の作成とその検証 		
<p>小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動観察を主体として、各児童の活動の理解度を毎時間記録していく。ビデオなども活用し、成長の様子を客観的に捉える(授業観察)「通年」 ・CAN-DO リストに基づく自己評価を詳細に分析し、今後の指導計画の作成や指導の在り方を検討する手立てとする(自己評価)「单元ごと」 ・基本的な英単語が「読める」「書ける」か、また、「書く」「読む」活動が児童の負担になっていないか、「書く」「読む」活動を導入することで、児童の英語表現力にどのような変化があるのかを検証する(アンケート)「5月、2月」 ・町独自のイングリッシュキャンプに参加した児童の感想や、意見などを基に、体験型英語学習の在り方を検証する(以後4年間継続) ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。 <p>5年生 児童英検ブロンズ 80%取得割合 60%</p> <p>6年生 児童英検シルバー 80%取得割合 70%</p>	<p>中学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業を英語で行うことで、生徒の英語学習に向かう姿勢に変化があるのか、リスニング力を中心に英語力に変化があるのかを検証する(アンケート)「5月、2月」 ・習熟度別少人数指導の効果的な在り方を検証する(運営指導委員会やCAN-DO リストの活用)「通年」 ・小学校外国語活動(教科型)の授業を経験してきた生徒と、従前の生徒の英語力や英語学習に対する意識の変化を、卒業までの3年間にわたり追跡調査し、その推移を分析する(以後4年間継続する) ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。 <p>1年生 英検5級 取得割合50% 英検4級 取得割合20%</p> <p>2年生 英検5級 取得割合60% 英検4級 取得割合30%</p> <p>3年生 英検5級 取得割合70% 英検4級 取得割合40% 英検3級 取得割合20%</p>	<p>高校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CAN-DOリストによる到達度の検証を4技能ごとに行い、小中との連続性を踏まえた評価の在り方について検証する(授業観察)「通年」 ・授業を英語で行うとともに、言語活動の高度化について検証する(運営指導委員会や教材研究、アンケート)「通年」 ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。 <p>1年生 英検3級 取得割合30% 英検準2級 取得割合10%</p> <p>2年生 英検3級 取得割合40% 英検準2級 取得割合15%</p> <p>3年生 英検3級 取得割合50% 英検準2級 取得割合20% 英検2級 取得割合10%</p>

第2年次 (H27)

- ・CAN-DO リストの能力記述文と言語活動の内容を関連させた独自教材の作成・開発とその検証
- ・小学校・中学校・高等学校の10年間を見通した系統制のある指導計画の開発とその検証
- ・小学校第5、6学年での「読むこと」「書くこと」の領域に関して、中学校での英語授業の内容との関連の検証
- ・朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などでの言語活動の効果の検証

小学校

- ・小学校第5、6学年でのCAN-DO リストに「読むこと」「書くこと」を位置付け、中学校との関連を図る(授業観察)「通年」
- ・各国の教材の改訂版と従来版を比較検討し、小学校段階にふさわしい文字指導の内容や難易度を考察する(運営指導委員会や教科書分析)「7、8月」
- ・小学校第5、6学年の授業で扱った英単語の発音、意味、綴りを理解しているかを検証する(テスト)「2月」
- ・小学校第5、6学年での「読むこと」「書くこと」の導入に関する関心・意欲について検証する(アンケート)「5月、2月」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

5年生

児童英検ブロンズ
80%取得割合 70%

6年生

児童英検シルバー
80%取得割合 80%

中学校

- ・オリジナルのタスク集について、活動主体の授業の内容や成果を検討する(授業観察)「通年」
- ・発信型の英語教育を推進し、特にパフォーマンス評価を含めた「話すこと」「書くこと」の力の適切な評価の在り方(定量的な評価法)を検討する(運営指導委員会や授業観察、ALT等との複数での授業評価)「通年」
- ・イングリッシュキャンプを実施し、授業で学んだ項目を実践の場で活用することによる、英語運用能力や、英語学習に関するモチベーションの変化を検証する(観察とアンケート)「8月」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

1年生

英検5級 取得割合60%

英検4級 取得割合30%

2年生

英検5級 取得割合70%

英検4級 取得割合40%

3年生

英検5級 取得割合80%

英検4級 取得割合50%

英検3級 取得割合30%

英検準2級 取得割合10%

高校

- ・パフォーマンス評価や自己評価、相互評価を基にコミュニケーション能力に係る変容について検証する(アンケート)「5月、2月」
- ・発表、討論、交渉等の教材研究を行い、授業実践での検証を行う(運営指導委員会や授業観察)「通年」
- ・幅広い話題について抽象的な内容を理解できるような教材を検証する(教材研究)「通年」
- ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

1年生

英検3級 取得割合40%

英検準2級 取得割合15%

2年生

英検3級 取得割合50%

英検準2級 取得割合20%

3年生

英検3級 取得割合60%

英検準2級 取得割合30%

英検2級 取得割合15%

第3年次 (H28)

- ・CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるような独自教材の改善と検証
- ・小学校・中学校・高等学校の10年間を見通した系統制のある指導計画の検証
- ・小学校第5、6学年での外国語活動の教科化に向けて、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のすべての領域に関し、中学校での英語授業の内容との関連を踏まえた学習内容の検証
- ・短い時間での言語活動の効果の検証とモジュール型の英語授業の検証

小学校

- ・これまでの3年間で行ってきた小学校第3、4学年での言語活動の内容や難易度が、当該児童の発達段階に対して適切かを検証する(授業観察)「通年」
- ・CAN-DO リストの自己評価と、教員による評価との相違点について検証していく(授業評価)「通年」
- ・小学校第5、6学年において、「関心・意欲・態度」「知識」「理解」「表現」の4観点での評価方法を検証する(授業観察等)「通年」
- ・小学校第5、6学年において、「関心・意欲・態度」を定量的に評価する手法を検討する(運営指導委員会や授業観察等)「通年」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

5年生

英語検定 5級
取得割合 20%

6年生

英語検定 5級
取得割合 30%

中学校

- ・実質的な研究2年目を迎え、特に、効果的な習熟度別少人数指導の在り方を再検討する(授業観察とアンケート)「通年」
- ・朝自習や、放課後学習の時間も活用し、実践的な英語の運用場面を設ける際の課題を明確化し、その成果をまとめ、中学校段階で効果的なモジュール型の授業の在り方を検討する(授業観察とアンケート)「通年」
- ・生徒がアウトプットした内容の定量的な評価法を検討する(運営指導委員会や授業観察等)「通年」
- ・タスクベースの授業を継続する上で、過年度までの生徒との相違点などを検証する(アンケート)「2月」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

1年生

英検5級 取得割合70%
英検4級 取得割合40%

2年生

英検5級 取得割合80%
英検4級 取得割合50%

3年生

英検5級 取得割合90%
英検4級 取得割合60%
英検3級 取得割合40%
英検準2級 取得割合20%

高校

- ・外部検定試験の活用やスピーキングテストの実施等によりコミュニケーション能力に関わる変容について検証する(アンケート)「10月」
- ・発表、討論、交渉等の授業について検証し、次年度の実践につなげる(教材研究)「通年」
- ・幅広い話題について抽象的内容を理解できるよう段階的に繰り返し指導することを検証する(運営指導委員会や教材研究)「通年」
- ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

1年生

英検3級 取得割合50%
英検準2級
取得割合20%

2年生

英検3級 取得割合60%
英検準2級 取得割合30%
英検2級 取得割合10%

3年生

英検3級 取得割合70%
英検準2級 取得割合40%
英検2級 取得割合20%

第4年次 (H29)

- ・CAN-DO リストの能力記述文と授業で行う言語活動の内容を関連させ、児童生徒が英語の運用能力の向上を実感できるような独自教材の検証
- ・小学校・中学校・高等学校の10年間を見通した系統制のある指導計画の検証
- ・小学校第5、6学年での外国語活動の教科化に向けて、「話すこと」「聞くこと」「読むこと」「書くこと」のすべての領域に関し、中学校における英語授業内容と関連させた学習内容の検証と、評価の方法と内容の検証
- ・校内での英語使用の場면을意図的に多く設定し、朝自習や昼休み、放課後学習会の時間などで言語活動を取り入れるなどして、その効果の検証と今後のモジュール型の英語授業の検証

小学校

- ・児童の活動の様子を把握し指導方法や指導内容を検証する(授業観察)
- ・児童の変容や成長の様子をビデオ等も活用して分析し、コミュニケーション能力や外国語活動へ向かう意識の変容を分析する(授業観察)「通年」
- ・小学校第5、6学年において、「読むこと」「書くこと」の理解について検証する。(テスト)「10月」
- ・年間を通して児童が書いた文章を集め、詳細に分析する。(運営指導委員会やパフォーマンス評価)「12月」
- ・小学校段階での観点別評価の観点を改善し、CAN-DO リストに基づく自己評価や、教員による評価、相互評価を含めた効果的な評価の在り方を検証していく(授業観察)「通年」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

5年生

英語検定 5級
取得割合 30%

6年生

英語検定 5級
取得割合 40%

中学校

- ・生徒の「話す」「書く」のアウトプットの実際の様子や、外部試験などを活用した「聞く」「話す」の結果を詳細に分析し、小学校第5、6学年での教科型で英語を学んできた生徒と従前の生徒の情意面や、各領域の能力の推移を比較分析する(テストとアンケート)「12月」
- ・生徒が取り組んだホームページや、ガイドブックの作成の内容や、プレゼンテーション活動などの内容を検討することで、中学校段階にふさわしい、発信型の活動の在り方を考察する(運営指導委員会やパフォーマンス評価)「1月」
- ・実際に英語を活用する場面をより多く設定したことによる、「実際に英語でコミュニケーションを図ることができる」喜びを感じさせる手立てを考察する(アンケート)「通年」
- ・英検等の外部試験により、初歩的な英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

1年生

英検5級 取得割合80%
英検4級 取得割合50%

2年生

英検5級 取得割合90%
英検4級 取得割合60%
英検3級 取得割合10%

3年生

英検5級 取得割合100%
英検4級 取得割合70%
英検3級 取得割合50%
英検準2級 取得割合30%

高校

- ・発表会や討論会を開催し、パフォーマンス評価等を加味しコミュニケーション能力に係る変容について評価する(アンケート)「10月」
- ・幅広い話題について抽象的内容を理解できるよう段階的な難易度を考慮した教材を検証する(運営指導委員会や教材研究)「10月」
- ・幅広い話題について抽象的な内容について討論できるよう科目間の関連付けを効果的に行う(運営指導委員会や教材研究)「通年」
- ・英検等の外部試験により、英語運用能力を測り、以下のとおりの検定合格率を目指す。

1年生

英検3級 取得割合60%
英検準2級 取得割合30%

2年生

英検3級 取得割合70%
英検準2級 取得割合40%
英検2級 取得割合15%

3年生

英検3級 取得割合80%
英検準2級 取得割合50%
英検2級 取得割合30%

○平成 27 年度の進捗状況・課題

<進捗状況>

平成 26 年度同様、平成 27 年度入学生の生徒に対して「英語が好きか」「中学校の英語学習で学びたいこと」の二点に関して、自由記述形式でアンケートを行った（表 1、表 2）。

平成 26 年度入学生の中で「英語は好きか」という質問に対して「好き」と答えた生徒は「少し好き」「ゲームをしたりするのは好き」を含めて 9 名いた一方で、「好きではない」と回答した生徒が 4 名いた。また、「中学校の英語の授業で学びたいこと」という質問に対して、「書く」という言葉を書いた生徒が 8 名おり、半数が書くことを学びたい、又は、頑張りたいという意識をもっていることが分かった。

一方、小学校で文字を書く活動まで経験した平成 27 年度入学生は、「英語が好きか」という質問に対して、「好き」と答えた生徒は「聞くのが好き」「話すのが好き」などを含めて 14 名いた。また、「中学校の英語の授業で学びたいこと」という質問に対しては「書く」ことを回答に含めた生徒が半数以上の 16 名おり、書くことに対する意識が高いという実態が明らかとなった。

表 1. 平成 26 年度入学生を対象としたアンケート結果 (n=16)

生徒 No.	「英語は好きですか？」	「中学校の英語の授業でどんなことを 学びたいですか？」
1	好きといえば好き。	書きをしっかりとできるようにする。
2	(無回答)	発音に気を付けたい(書くのは得意だけど)
3	好きであるけど得意でもある。	英文をすらすら読むこと。
4	好きです。	英文を間違わないで書けるようになる。
5	英語は全部好き	聞き取りや書き取りなどをがんばりたい。
6	ソーソー(ゲームをしたりするのは好き)	英語をすらすら書けるようになること。
7	少し好きです。	英語は好きだけど苦手なので全部頑張りたいです。
8	少ししか読めないから苦手。 発音もできなくて苦手。	文を読み書きすることを頑張りたい。
9	好きです。	小文字をはっきり書く。英単語を早く覚えたいです。
10	そんなに好きじゃない。 英語を書くのが苦手。	単語を覚えて書くこと。書くのが苦手だから。
11	あんまり好きじゃない。 英語を書くのが苦手。	苦手だから英語を書くのを頑張る。
12	好きです。	しゃべる時にちゃんとと言えるように頑張りたい。
13	全部好き。	英語の小文字を頑張りたい。
14	好き。	英語を書けるようになる。
15	あまり好きじゃない。	いろいろと英語で言えるようになりたい。
16	全体的に好きじゃない	ない

表 2. 平成 27 年度入学生を対象としたアンケート結果 (n=25)

生徒 No.	「英語は好きですか？」	「中学校の英語の授業でどんなことを 学びたいですか？」
1	書くのが好き。話すのは少し苦手。	長い文を書きたい。英語の本を読みたい。
2	書くのが好き。発音が苦手。	英文、作文を英語で書きたい
3	ローマ字と書くのと話すのが好き、読むのが 苦手。英語は好き	ある程度会話をできるようにになりたい
4	書くのが一番好き。小学校の時のゲームは 好きじゃない	書きたい、読みたい
5	読むのも書くのもある程度できる。洋楽も聞 く。	基本とその応用
6	書くのはもっとたくさんのことを知りたい。英 語ももっといいたい	書いたり読んだりしたい

7	特に嫌いなものはない。話したり、書くのも好き。	長い文をスラスラと書いてみたい
8	文字を書くのは好き。文を読むのは嫌いではないけど苦手	英語の先生と話したり、長い文を書いてみたい
9	全体的には好きではない。書くのは好き。	たくさん話したい
10	書く、話すは好き。聞くのはあまり好きじゃない。	外国の人と上手に話してみたい
11	書くのは嫌い。話すのは好き。	ローマ字以外にも書いてみたい
12	授業でスラスラ言われると分からない。単語は読めるので大丈夫	文を書いて読みたい
13	聞くのは好き、書いたり読んだり苦手	苦手な書いたり読んだりをして入試に役立てたい
14	話したり聞いたり覚えられる。文字を書くのは好き	長い文を書いて話してみたい
15	楽しいけど読んだり話すことが苦手	英語で文を書けるようになりたい。英語が得意になりたい
16	アルファベットを書くのは好き。話す聞く、文章を書くのは苦手	会話などを学びたい
17	書くのは苦手。読むのが好き	難しい言葉
18	映画を英語で見るけど苦手	英語で学校の中を説明してみたい
19	書くのが苦手だけどアルファベットは書ける	長い難しい文を書いてみたい
20	読むのは好きじゃないけど、書くのは大好き	たくさん字を書きたい
21	英語を聞くのは好き、小文字を書くのが苦手	英語で長い文、手紙を書きたい
22	言ったり読むのは好きだけど書くのが苦手	手紙を書きたい
23	文字は書けるけど話すことはできない	日本語を全部英語で話したい
24	書くのは好きだけど読むのは苦手	長い文を書きたい
25	アルファベットが苦手(読み方が分からない)	物語を読みたい

平成 26 年度、27 年度ともに、1 学期の終わりには、学習のまとめとして自己紹介を題材として既習事項を復習させることを意図した英作文に取り組ませた。

平成 26 年度入学生に対しては、寿都町で使用している教科書に掲載されている自己紹介を基に指導を行った。この教科書では、8 文 (31 語) の自己紹介の例文が掲載されている。さらに、この例文とは別に、穴埋めをするだけで自己紹介の英文が完成する活動も用意され、これらを活用したことで生徒たちが活動に取り組みやすくなっている。その一方で、完成された英作文が、生徒自身の力を反映させたものになっているのかは疑問も残っていた。

そこで、平成 27 年度入学生に対しては、教科書に掲載された穴埋め式の活動をそのまま扱うのではなく、全てを生徒自身の手によって取り組ませた。その際には、中学校で学んだ表現だけではなく、小学校での既習表現も活用させ、一人一人の生徒が本当に伝えたい自己紹介を英文にまとめるように促した。小学校では音声の指導が中心であるため、音声の知識はあるものの綴りが分からないことも多く、その場合は、英和・和英辞典の使用も認めた。

完成した自己紹介の英作文を比較すると、平成 27 年度入学生の方が、使用した文数と総語数の平均で平成 26 年度を上回った (表 3、表 4)。このように、平成 27 年度入学生には、教科書の枠にとらわれず、実際に伝えたいことを英文にまとめさせた結果、文数や総語数が増加しただけではなく、教科書では登場していないが小学校では既に既習であった because などの接続詞を効果的に使いこなしながら、充実した自己紹介文を完成させることができた。

表 3. 自己紹介の英作文における文数

文数	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
平成 26 年			1		3	3	5	2											
平成 27 年						1	1	1	4	3	3	4	1	3	1	1	1	1	1

表 4. 自己紹介の英作文における総語数

総語数	36 ～ 40	41 ～ 45	46 ～ 50	51 ～ 55	56 ～ 60	61 ～ 65	66 ～ 70	71 ～ 75	76 ～ 80	81 ～ 85	86 ～ 90	91 ～ 95	96 ～ 100	101 ～ 105	106 ～ 110	111 ～ 115	116 ～ 120
平成 26 年	1	1	2	4	3	2	1										
平成 27 年				1	1	4	4	1	5	1	3	1		2	1	1	1

<成果>

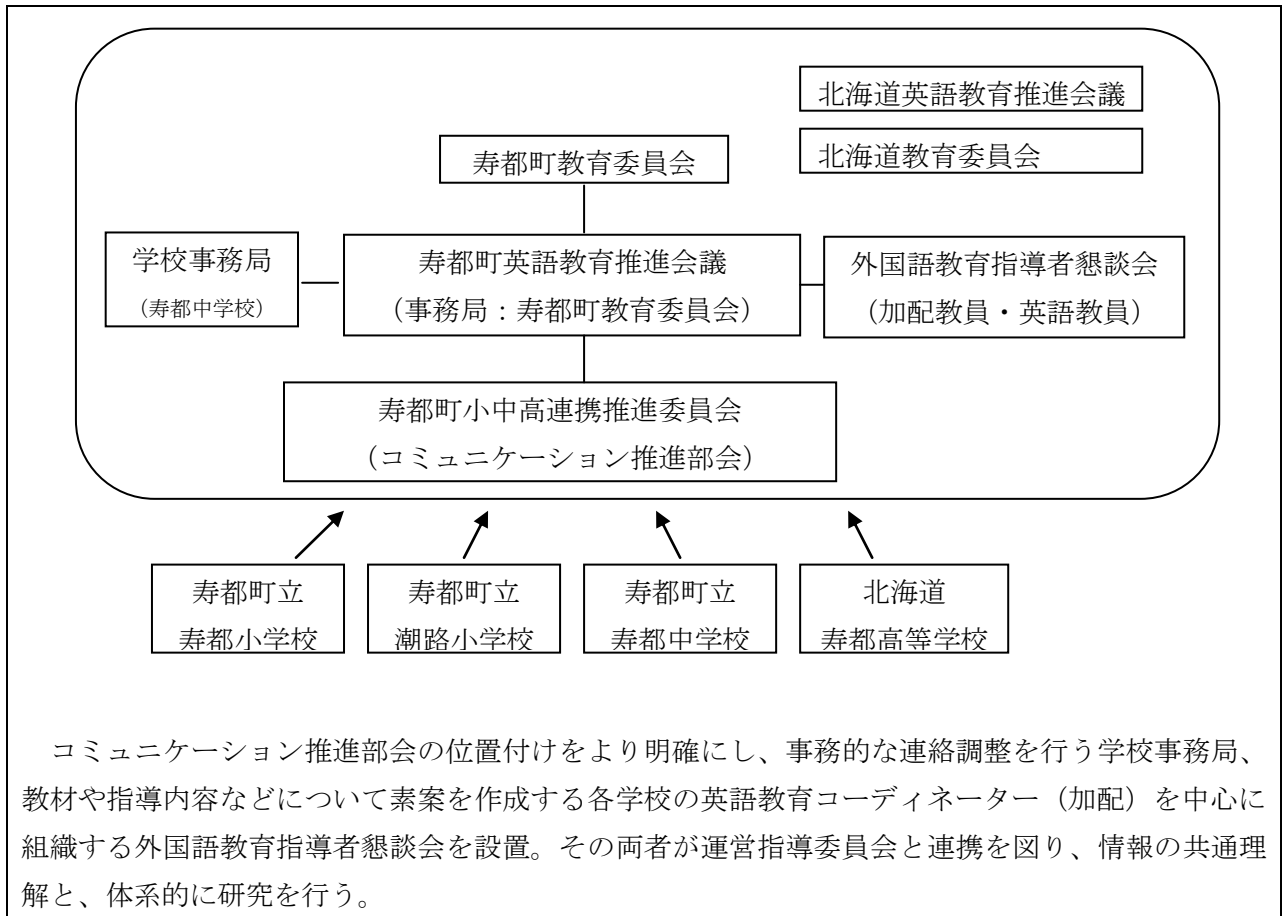
- ・ 中学校 1 年生に対して、小学校の学習内容を生かして自己紹介の英作文を指導したことにより、過年度よりも文数、語数ともに多く使って豊かに表現していた。
- ・ 外部試験として、中学校と高等学校では英語検定を、小学校高学年では英検 Jr. 学校版を全員が受検し、合わせて英検 IBA を小学校第 6 学年から高等学校まで全員が毎年受検することにより、一人一人の分野別の英語力の伸長を客観的に測ることができるようになった。
- ・ 小学校から高等学校まで統一した内容の質問紙によるアンケート調査を実施することにより、英語学習に対する情意面での調査を行うことができるようになった。今後も毎年同時期に同じ項目の調査を実施することで、個々の英語学習に対する意識の変容も見取っていく。
- ・ パフォーマンス評価を随時実施、また必要に応じて授業や評価の様子のビデオ撮影を行うことにより、個々の伸長をより客観的に分析できるようになった。

<課題>

- ・ パフォーマンステストの設定の工夫や具体的な評価規準・方法を明確にする必要がある。
- ・ 話すことや書くことなどの表現の能力の育成にかかわり、流暢さ (Fluency) の向上が見られるが正確性 (Accuracy) を一層高める具体的な方策を検討する必要がある。
- ・ CAN-DO リストを活用した指導と評価について、一層効果的な方策を検討する必要がある。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

① 北海道英語教育推進会議

<活動計画>

○活動計画

- ・ 1月、2月、3月に開催する会議において、本事業の進捗状況、成果や課題を報告するとともに、委員から意見をいただく。

② 寿都町英語教育推進会議

<活動計画>

平成27年 5月	第1回運営指導委員会	内容・授業研修及び今年度研究内容に関する指導助言
平成27年 7月	授業公開（小中高）	
平成27年10月	先進校調査研究（埼玉県・群馬市）	
平成27年12月	第2回運営指導委員会	
平成28年 2月	内容 授業研修及び研究の方向性の指導助言	
	第3回運営指導委員会	
	内容・研究評価及び次年度研究内容に関する指導助言	

5. 年間事業計画

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	中学校入学段階でのリスニングテスト（毎年実施）	
5月	寿都町小中高連携推進委員会による学校間の取組協議（全体会）	第1回寿都町英語教育推進会議
6月	先進校視察（島根県） 英語検定 寿都町小中高連携推進委員会による学校間の取組協議（授業見学について）	
7月	第14回小学校英語教育学会全国大会での研究発表（広島大学） 授業公開（寿都小学校） 授業公開（寿都潮路小学校） 授業公開（寿都中学校） 授業公開（寿都高等学校）	
8月	第41回全国英語教育学会熊本大会の研究発表（熊本学園大学） 寿都町小中高連携推進委員会による学校間の取組協議（授業反省）	
9月	寿都町小中高連携推進委員会による学校間の取組協議（乗り入れ授業について）	
10月	先進校調査研究（埼玉県・群馬県） 乗り入れ授業（各学校間） 英語検定	
11月	英語能力判定テスト（中学校、高等学校） 寿都町小中高連携推進委員会による学校間の取組協議（乗り入れ授業反省）	公開研究会
12月	寿都町小中高連携推進委員会による学校間の取組協議（年度反省）	第2回寿都町英語教育推進会議
1月	英語検定（中学校・高校1、2年生全員受検）	
2月	児童英検（小学校5、6年生） 英語能力判定テスト（小学校6年生） 次年度研究推進計画の協議	第3回寿都町英語教育推進会議
3月	次年度研究推進計画の確認	
<p>【その他の取組】※あれば記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的に小学校・中学校の英語担当教員が乗り入れ授業を行う ・定期的に町内英語教育担当者が集い、指導内容や評価等について話し合う英語教育指導者懇談会を開催する 		